

## アートをつばさ11 -「縄文展」に行きました。-

8月末に、東京国立博物館（東博）で開催されていた特別展「縄文—1万年の美の鼓動」に行きました。会期末直前だったので、多くの見学者でした。私は、開館前に40分間並び、30番目で入館しましたが、開館時には500名以上の方が並んでいました。

現在、国宝に指定されている縄文時代の遺物が6点あります。有名な**火焰型土器**と、**土偶5点**です。今回の「縄文展」では、その全てが展示されていました。

土偶5点は、下の写真の左から「合掌土偶」（青森県八戸市）、「仮面の女神」（長野県茅野市）、「縄文のビーナス」（長野県茅野市）、「中空土偶」（北海道函館市）、「縄文の女神」（山形県舟形町）<（ ）内は出土遺跡の所在地>です。

私は、大学時代に考古学を専攻し、**縄文時代が専門**でしたので、教員になってからも、全国各地の博物館で、多くので縄文の遺物を見て来ました。**国宝土偶5点**も以前に見ていました。私にとって縄文の遺物たちは、子どものような存在です。ですから、今回は「**久しぶりだね！元気だった？**」いっぱいの人に見てもらえて良かったね！」という感覚でした(^o^)!

今回の特別展は、「**縄文の美**」をテーマに、**アートな感覚**での展示が目立ちました。芸術家**岡本太郎**は、1951年11月、東京国立博物館で縄文土器を見て衝撃を受け、翌年、美術雑誌『みずゑ』に「**四次元との対話—縄文土器論**」を発表しました。この反響によって、日本美術史は縄文時代から語られるようになったといわれています。

近年の展覧会では、必ずと言っていいほど「**写真撮影可能エリア**」が設けられています。「スマホで写真を撮って、SNSで投稿してください!」というメッセージです。今回も、大型の縄文土器3点と、岡本太郎も撮影した「**顔面把手**」が撮影可能でした。

